

陳舜臣さんと 神戸を歩こう

P a r t 3



陳舜臣さんを語る会

11 陳舜臣さんと移情閣(松海別荘、孫文記念館) 1

「囚人の斧」の舞台、
松海別荘

ここでは中短編集『異郷の檻のなか』収録の中編、「囚人の斧」をとりあげます。

ハイライトの舞台は、呉錦堂の舞子の宏壮な邸と松林などその周辺です。

ここに、よく知られた一枚の写真があります。

一九一三年三月十四日、舞子の自身の別荘前、居並ぶ神戸華僑、財界名士のなか、前列中央、孫文の横に誇らしげな呉錦堂が写っております。「囚人の斧」は、この写真の裏にあった一つの出来事を描いています。裏にあった出来事、それはフィクションですが。

登場人物

実在の人物としては呉錦堂及び孫文が登場し、架空の人物として、呉育雲、曹永忠らが描かれます。

呉育雲…主人公の青年。呉錦堂の援助で、土木工学を学ぶため、日本



留学という、一見、夢のような道を進む。

しかしそのことが呉錦

堂に対する負い目、心の負担となり「牢獄にいられたようだ、囚人として生きねばならない」と悩む。

東京での留学を終え、舞子の呉邸に住む。

曹永忠…育雲同様、呉

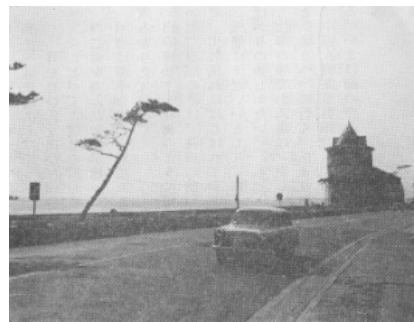
錦堂にその才を認められ、法律を学ぶため日本へ留学。一旦、中国に帰り、呉錦堂の中国での事業を手伝っていたが日本へ戻り、呉邸に住む。

金(カネ)のため、袁世凱の手先となり孫文暗殺を計画。

『神戸というまち』

「二つの海」 P.121~123

中国人実業家呉錦堂(大正十五年没)が舞子に「移情閣」を建てたのは、大正六年のことである。いまは海のすぐそばで、護岸のおかげでやっと波から守られているような状態



同著より

態だが、新築当時はその前にひろい砂浜があり、呉錦堂はその砂浜を馬にのって、よく明石まで遊びに行ったという。いまは馬の通れそうところはない。…

彼の前身については、いろんな伝説がある。ひどいものになると、国で船頭をしていたとき人を殺したので、日本に逃げてきたという説もある。成功者は他人から嫉妬されるので、そんな話をつくられたのであろう。

「青山一髪」と「天涯の船」、孫文が取り持った

陳舜臣さんと玉岡かおるさんの対談
移情閣三階、孫文胸像前

十年前の二〇一五年一月二日、作家の陳舜臣さんが亡くなられ、二日後、玉岡かおるさんの追悼文、「陳舜臣さんを悼む」が新聞に載りました。

対談当日、陳舜臣さんは、奥さんもご一緒でした。この日、両氏の対談は移情閣三階の孫文胸像前で行われました。詳しくは、「ネットミュージアム兵庫文学館 陳舜臣館」をご覧ください。この対談は同文学館の企画でした。

(T)



12 陳舜臣さんと移情閣(松海別荘、孫文記念館) 2

陳舜臣さん、毛沢東の胸像があつたころの移情閣を訪れる(1974.11.19)

1974年11月19日、陳舜臣さんは、北京大学社会科学友好代表団を案内、移情閣を訪れています。代表団の交流活動は、京都大学人文科学研究所編『学問に架ける橋』(小学館 1976年)として発行されていますが、この内、交流日誌の11月19日の箇所を下にあげました。ここに、陳舜臣さんの名前が出ています。

下の写真2葉は孫文記念館安井三吉名誉館長所蔵です。撮影日時は1973年11月となっています。陳舜臣さん訪館の時もこのような状況だったのですが、陳さんはどう感じ何を思われたでしょうか。ちなみに、1974年11月といえば、陳さんは、北京、大連、延安、西安、南京など、中国旅行をされてきたばかりの時期です。毛沢東は存命です。

下の写真、孫文胸像の上の赤いパネルには次の文章が記されています。



纪念伟大的革命先行者孙中山先生!

纪念他在中国民主革命准备时期,以鲜明的中国革命民主派立场,同中国改良派作了尖锐的斗争。他在这一场斗争中是中国革命民主派的旗帜。

纪念他在辛亥革命时期,领导人民推翻帝制、建立共和国的丰功伟绩。

纪念他在第一次国共合作时期,把旧三民主义发展为新三民主义的丰功伟绩。

他在政治思想方面留给我们许多有益的东西。

现代中国人,除了一小撮反动分子以外,都是孙先生革命事业的继承者。

1956年11月12日《纪念孙中山先生》毛沢東



↑上の写真は毛沢東胸像。下の赤い台の部分には、

「毛沢東同志は、現代におけるもっとも偉大なマルクス・レーニン主義者である。毛沢東同志は、天才的、創造的、全面的にマルクス・レーニン主義をうけつぎ、守り、発展させてマルクス・レーニン主義をまったく新しい段階に高めた」とあります。

この文章は、林彪が『毛主席語録』の再版のために書いたまえがきです。

十一月十九日(火)
いよいよ京都をはなれる。名神高速道路をバスで神戸大学へ。戸田義郎学長と会見。各学部長が同席される。昼、六甲山上で戸田学長主催の昼食会。神戸という土地がらもあって中国への親近感はずいぶん。教育制度などについてなごやかな懇談がつづく。六甲は満山紅葉し、眼下にのぞむ海が美しい。午後の講演会はストのため中止、作家陳舜臣氏らの案内で孫文ゆかりの六角堂を訪ねる。久しぶりにくつろいだ一日だった。
今日から仏教大学助教授吉田富夫氏が通訳をかねて随行して下さる。

枠内、傍線の箇所に陳舜臣さんの名が見える
(傍線は加筆)

13 泰安公司 神戸華僑歴史博物館 陳舜臣アジア文藝館

泰安公司 家業に従事した10年

泰安公司の現社長陳武洋氏は舜臣さんの弟仰臣氏のご長男です。

「祖父陳通は海岸通りの社屋が空襲で焼けた後、北長狭通3丁目のこの地（JR元町駅東口を北へ出て鯉川筋を渡ったところ）に平屋を建て、会社を移しました。父と舜臣伯父、ほか数人の社員が仕事をしていたのはこの時代です。

やがて、舜臣伯父は作家へと道を変え、家業を継いだ父は、この地にビルを建設しました。いまの4階建て泰安ビルです。一昨年、竣工50年を祝いました」（2020年7月、電話にて取材）



木立の右が泰安ビル
JR高架下から北を向いて撮影

『街道をゆく21』『陳徳仁氏の館長室』

冒頭の数行を引用します。

私が大阪の語学の学校に通っていた昭和十年代の後半、神戸から通学している学生のなかで、陳姓のひとがふたりいて、どちらも温厚で秀才の評判が高かった。

ひとりは中国語を専攻していた陳徳仁氏であった。他のひとりはインド語を専攻していた陳舜臣氏で、陳舜臣氏によると、神戸からの通学組のひとたちがこの同姓の兩人を区別するのに、わざわざ陳徳仁氏のほうを、男前の陳とよんでいたという。陳舜臣も決してぶおところではないのだが、陳徳仁氏が鼻筋のとおった面長の容貌で、姿勢がいい上に、撓うような痩身であった

ためにそういう符牒(?)がふさわしかったのだろう。



1982年取材時撮影 於：神戸華僑歴史博物館
右から、陳徳仁氏、司馬遼太郎氏、陳舜臣氏

陳舜臣アジア文藝館



入口



残念ながら
現在休館中!

- 名称：陳舜臣アジア文藝館
- 場所：旧神戸税関メリケン波止場庁舎3F
- 陳さんの願い：「アジアの若者たちが自由に交流できるスペースになれば」
- 展示・所蔵品：
 - ・陳舜臣著作 ・研究・調査用蔵書
 - ・自筆原稿 ・家具・調度品（机、万年筆、ポールハンガー、トロフィー、額、色紙、書、焼きもののほか）



14 「海軍営之碑」と「海軍操練所跡」記念碑

海軍営之碑は神戸の町誕生のモニュメント
海軍操練所は神戸の町のたましいの源流

以下、『神戸というまち』
(一九六五 至誠堂新書19)
「金星台から」より抜粋・引用します。

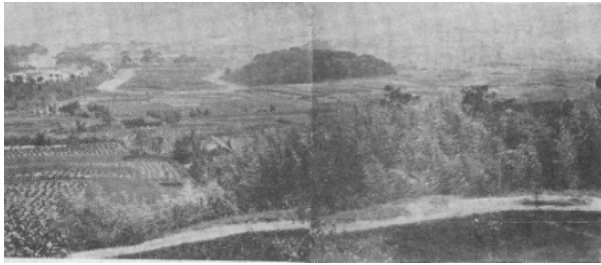
神戸市立南蛮美術館に、明治二年と書きこんだ古い写真がある。

こんもりした生田の森の東がわに競馬場がみえる。おそらく、金星台からかなり東よりの、三本松不動尊あたりからとった写真であろう。沖に外国船が数艘うかんてい

るが、町なみはなく、一めんに田畑と森ばかりである。

神戸市は、この写真にみる田んぼのうえにできた。京都や大阪とちがって、神戸は明治以後にできた新興都市なのだ。

神戸の町は、いつ生まれたのであろう？
制度のうえではなく、実質的な誕生を考えると、筆者はそれを、『海軍操練所』が設置



されたとき、としたい。海軍営の碑には、将軍家茂がその地形を相して、海軍営の基をつくらせたところ。もちろん事実は勝海舟の進言によるものだ。地形を相したのは、ほかならぬ勝海舟だった。海軍営の設置は神戸の地形のもつ力を軍事的に利用しようとしたものであり、その『地形力』は同時に、近代海港都市を育てる酵素でもあった。海軍営ができたとき、この地は新時代の港都たるべき運命の第一歩を、踏み出したといえよう。その意味で、金星台の

海軍営の碑は、神戸の町の誕生を記念するモニュメントでもある。神戸の町のたましいをさぐろうとするなら、その源流を『海軍操練所』にもとむべきである。

勝海舟と坂本竜馬が
近代神戸人の祖

続けて『神戸というまち』「金星台から」より抜粋・引用します。

海軍操練所の塾生は、幕臣、諸藩の家臣を問わずに採用した。総管が勝海舟で、塾頭が坂本竜馬だった。この二人を近代神戸人の祖とみてよいだろう。

航海術や海軍技術などは実力本位である。身分の高下は、問題にならない。この近代的な合理性が、海軍操練所を貫いていた。それが、神戸という町の血管のなかにも、流れこんだのである。

幕末は大義名分の観念論が猖獗した時代である。観念的尊王攘夷論が、若い世代を風靡した。

海舟が海軍操練所をつくったのは、じつはそうした観念論に浪費される若いエネルギーを実利的な海軍技術習得の方向に向かわせようというねらいもあったのである。塾生は海舟の思惑どおりにはな



諏訪山金星台
上：海軍営之碑

下：金星観測記念碑

らなかつた。塾生でひそかに京都に潜入して、政治運動をする者が、あとを絶たない。かりにも海軍操練所は幕府の機関である。その書生が反幕運動に参加するのは、もってのほか、というのだ。

海舟はこの海軍操練所に情熱をもっていた。創立にあたって、彼は日記に、

——興国之基漸く立たんとす。と書いているほどだ。だから彼は、小野浜に碑石を建て、『鴻基の記念』とした。

幕府の逆鱗にふれた海軍操練所は、慶応元年に廃止され、海舟は軍艦奉行をクビになった。——碑石を深く土中に埋む。と海舟日記にある。

維新後、碑石は掘りおこされて、金星台上に移された。



「海軍操練所跡」記念碑
神戸市中央区波止場町、神戸第二地方合同庁舎の東道路向こう際

15 「三本松不動尊」と「私の好きな道」

北野町の三本松不動尊

まず、『三本松伝説』（一九九一 徳間書店）所収「三本松伝説」の内容です。

語り手、私は、戦中、昭和19年の秋、それまで住んでいた海岸通りの家から北野町に引っ越した。近くに不動尊の祠（ほくら）があった。むかしここに三本の大きな松があったという。近所の異人館のお手伝いさんのSさんは、話を自説に都合のいいように三本松不動尊の祟（たた）りに結びつける。精神に異常をきたしていたフランス人M姉妹のこゝと、アメリカ人ハリマンさんの神隠しなど。

続いて、「三本松伝説」より抜粋・引用します。

——祟^{たた}りがありましてね。それであんなところにお不動さんを祀ったのですよ。と、Sさんは三本松不動尊のいわれを説明した。

北野町の二丁目と二丁目を分ける坂の南半分を不動坂という。二丁目側の角のところに不動尊の祠があるからだ。むかしここに三本の大きな松があったらしく、俗称「三本松」である。



hirukarasanpo.blog.fc2.com

不動明王はヒンズー教のヴァア神が、仏教にとりいれられたものといわれている。真言行者の守護神で、右手に剣、左手に索をもち、威怒身で猛炎を負い、盤石座に安住する。炎と利剣と索は、はげしいものを鎮めると思われたのであろう。

不動坂を西へ折れて
天神さんにでる小道「私の好きな道」

「私の好きな道」は、『神戸わがふるさと』第一部 エッセイ「I」、冒頭の短編です。その全文を次に転載します。

神戸北野町の不動坂は、不動明王の小さな祠をすぎると道はやや狭くなり、そこをすこし登ると、西へ折れて天神さんに出る小道がある。もうふつうの乗用車は通れない。五十年來、わたしはこの小道を愛しつづけている。

私が北野町に住みはじめたのは戦時中のことだった。あたりは外国人の居住地域なので、戦争で引き揚げた家族が多く、ただでさえ閑散とした道に、ほとんど人影はなかった。

戦後、かなり長いあいだ、復興ムードにもとり残され、

私にとっては変わらぬ、いとしの小道でありつづけた。ところが、NHKドラマの『風見鶏』で、神戸の異人館が一躍有名になると、にわかに様相が変わってきたのである。

天神さんの前から風見鶏の家にかけて、その前に観光用の休憩所などがつくられ、道路も拡張され



二〇二五年四月撮影

た。幸いなことに、私の愛した小道は百メートルほど、拡張もされなかった。拡張のしようがなかったのであらう。観光客が増え、彼らのためのレストランなどもできたが、そんなことに、いちいち文句をつける気持ちはない。

いつまでも変わらないのは、かえって気味が悪いことである。適当にブームに乗り、時代に合わせることに反対しようとは思わない。車が通らないので、その百メートルほどは、目をとじて歩くことができる。観光客につきあたるおそれはあるが、まぶたの裏に青春の思い出のかけらがキラキラきらめき、それがかみしめながら歩く。それで満足である。